

「明日、世界が減びるとしても、今日、あなたはリンゴの木を植える」。開高健が愛した言葉だという。この言葉が時折、思い出したように表層意識に顔を出す。

この言葉、字義に解釈すれば、「人生の明日に、どんな事態―この地球が終焉(しゅうえん)を迎えるような事態―が待ち受けていたとしても、明日のためになすべきこと―リンゴの木を植えること―をやめてはいけない」となる気がする。一方で、意地悪く解釈すれば、「明日、地球が減びようとしているにもかかわらず、あなたは今、まったく意味のない、無駄なことをやっている。そんな愚か者だ」とも読めなくもない。私がこの言葉にひかれるのは



やまもと たろう
山本 太郎

リンゴの木を植える

この後者の解釈が故ではないかと思ふことがある。どんな事態が待ち受けているとしても、明日の希望のために、今日を大切にす。確

かに素晴らしい態度だと思う一方で、私自身はそれほど立派ではないと感じる。「明日、地球が減びようとしているにもかかわらず、無駄なことをやっている愚か者だ」という「愚か者」に深い共感を覚える。日々の出来事のなかには、私たちの手が届かないこともある。地球の終焉や、世界の終わりは、そうしたことの比喩(ひゆ)であろう。そんなとき、私は、愚か者と言われる

ながら、なおリンゴの木を植える人でありたい気がする。人間は聡明であると同時に愚かな存在だと思ふことがある。だから

らこそ、助け合って生きていく必要がある。そんな活動の一つが、私の仕事でいえば、国際医療協力ということになる。多くは貧しい南の国で行われる。

しかしそこでの活動が、厚意で迎えられるばかりでないこともある。時に、その行為が悪意で報われることもある。しかし、それでも私は思う。今日、リンゴの木を植える人間でありたい。あるいは、リンゴの木を植えようとする人に共感を覚える人間でありたい。ルターの言葉は以下であったともいう。「たとえ明日が世界の終末だとしても、私は今日リンゴの木を植えるだろう」。リンゴの木を植えるのは「あなた」ではなく、「私」なのだ。(長崎大熱帯医学研究所教授)